

歴史を語る建物たち

秋田編
(第2回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧日新館 (横手市)



横手市中心部の小高い丘の上、秋田地裁横手支部のとなりに、木造2階建ての洋館が建っている。

明治35年に、外国人用旅館として建てられた旧日新館で、のちに旧制横手中学校(現・横手高校)に赴任した外国人教師の住宅として利用された。

現存する木造洋風住宅としては秋田県内唯一で、昭和59年に、県の有形文化財に指定されている。

アメリカから英語教師が来県

明治32年、秋田県第三中学校(同34年に秋田県立横手中学校と改称)が横手町(当時)に開校した。

同33年、県内の師範学校および中学校に、英語教師として外国人を雇用する議案が県議会に提出され、同35年、アメリカ人のチャールス・C. チャンプリンが横手中学校に赴任した。

チャンプリンは当初、町内の小坂旅館に投宿していたが、日本家屋の窮屈さに閉口していた。そこで、館主の小坂亀松は横手の威信にかけて、外国人用旅館「日新館」を建設した。大工棟りょうの藤村初五郎は洋風建築が初めてだったので、小坂は東京など県外各

地へ藤村を視察に行かせた。

もともと、外国人用旅館といっても、当時横手に来る外国人旅行者はほとんどいなかったもので、いつしか日新館は、横手中学校に赴任した外国人教師の住宅として利用されることになった。



スマイザー宣教師(左)と鶴岡タカ(右)。真ん中の女性は、日新館に礼拝に来ていた人だと思われる。写真の裏に「1949」と書かれているので、昭和24年頃に撮影されたものだろう。写真提供：鶴岡功子さん

大正3年、6人目の外国人教師として来日したアメリカ人宣教師、M. M. スマイザーは、昭和8年に教職を辞すと、小坂から日新館を土地ごと買い取り、そこに住み続けながら本職の宣教活動に専念した。妻子は本国に戻っていたため、近隣の女性を3人、お手伝いさんとして雇った。

サイドカー付の赤いバイクで宣教活動に走るスマイザーは、横手でも有名であったという。

スマイザー先生を守れ!

昭和16年に太平洋戦争が始まると、日本中で反米感情がわき上がった。横手も例外ではなく、日新館も「アメリカ人が持っている土地建物」ということで、日本軍に没収される恐れがあった。そこで、スマイザーの教え子の弁護士が一計を案じ、スマイザーに、自分が死んだら土地建物は「日本人」である鶴岡タカに譲る、といった内容の遺言状を書かせた。鶴岡は、最後の一人として残ったスマイザーのお手伝いさんで、昭和30年に彼が日新館で亡くなるまで、終生面倒を見続けた。

また、スマイザーは戦時中、留置所に入れられていたことがある。これも、スマイザーが反米感情の強い日本人に襲われることを心配した地元の警察署が、留置所なら監視がいるからむしろ安全だろうという理由で行った妙技であった。

幼少時代をスマイザーと過ごしたことがある、現所有者の鶴岡功子さんは、「スマイザー先生を尊敬し、親しみを持つ人も、横手には少なくありませんでした。そうした方々に先生は守られたのだと思います」と当時を振り返る。

漫画「ゲゲゲの鬼太郎」にも登場

スマイザーの死後、遺言どおり日新館の土地建物は鶴岡タカに相続された。裁縫が得意だった彼女は、そこに横手洋裁学院を開校した。昭和38年に彼女が亡くなり、土地建物と学校は姪の鶴岡功子さんが相続したが、生徒数の減少などから、昭和49年に横手洋裁学院は閉校となった。

その後の建物をどうするか、功子さん自身も悩んだ時期があったようだが、建物に惚れ込んだ横手市職員が奔走し、昭和59年に文化財指定、昭和60年に保存修理工事がなされた。現在は、建物の一部に功子さん一家(ご主人と息子さん2人)が住み、残りの部分を無料で公開している。

さて、旧日新館は100年以上の歴史を誇る建物だけに、テレビや雑誌、新聞などでの紹介は枚挙に暇がない。人気テレビ番組の生放送中に、「今あなた、テレビに出ているわよ!」と知人から電話があり、功子さんが「これ、録画じゃなくて生放送なの!」と慌てて電話を切った笑い話もある。また、ジョギング中の男性がフラッと建物に立ち寄って記帳していったので、

後で名前を見たら、仕事で横手に来ていた大物俳優だったというエピソードもある。

さらに特筆すべきは、漫画「ゲゲゲの鬼太郎」に旧日新館が登場することだろう。作品中では「国防大臣宅」という設定だが、アシスタントが偶然撮った写真を水木しげる氏が気に入り、作品に取り入れたようだ。筆者も漫画を拝見したが、細部にわたって非常に丁寧に描かれており、まさに旧日新館そのものである。

来館者との交流を楽しみに、建物を守る

パンフレットや旅行ガイドブック、横手市HPの観光案内などには、公開日は毎週水曜日と書かれているが、実は、案内役の功子さんが在宅であれば、他の曜日でも館内を見学することができる。実際、筆者が取材に訪れたのは月曜日であったが、門柱には『公開中』の看板が掲げてあった。「以前は自分も仕事をしていましたので、本当に水曜日だけ公開していた時期がありました。ただ、今は退職して比較的時間がありますので、不定期ですが、水曜日以外にも開館することがあります」と功子さんは話す。

また、来館者にはできるだけ声がけし、時間があるお客さんには、公開部分の応接室で飲み物やお菓子などを振る舞うという。「お客さんからいろいろな話を聞いて、また別のお客さんに話をする。そんな交流が楽しいのです」(功子さん)

そうしたことを知ってか、来館者はリピーターが多いそうだ。秋田市周辺で5~6回、地元の横手市周辺では10回以上訪れる人も珍しくないという。横手市内には喫茶店があまり多くないこともあり、「見学というより、休憩に来るお客さんも多いのではないのでしょうか」と功子さんは笑う。

そんな功子さんの目下の悩みは、次世代への建物の継承だ。「例えば、地元の子どもたちにボランティアで掃除をしてもらい、建物の価値を知ってもらうことも、一つのアイデアとして考えています。自分たちだけではなかなか難しいので、地域の協力も得ながら建物を守っていければ良いと思います」と語る功子さんの言葉からは、歴史ある建物に対する深い畏敬の念と愛情が感じられた。(フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史)

スマイザー宣教師がアメリカから運んでくれた。ロッキングチェアがアメリカから運んでくれた。息吹が聞こえる。(筆者撮影)

